

ふじさんミュージアム企画展

富士山の湧水と織物の町

下吉田の歴史 展示目録

会期：令和6（2024）年2月21日～5月27日

江戸時代、郡内（山梨県都留郡）最大の町として発展を遂げたのが下吉田です。縄文時代から人々が住み始めた下吉田は、数多くの場所から富士山の湧水が流れ出てくる水の町でもありました。縄文時代までは山すそに住んでいた人々は、平安時代になるとこれらの湧水が多くある平地に集落を営むようになり、江戸時代以降は桂川から水を引くことで、現在も本市の中心部である本町通りの町並を開発していきます。また、繭からの糸取り、染色、撚糸や織機の動力として豊富な水が欠かせない織物が盛んとなり、現在に続く織物の町「下吉田」が成立します。

本展では、下吉田に伝来してきた古文書・絵図・写真を通して、下吉田の歴史を紹介します。



1 下吉田の始まりの地 —縄文時代～平安時代—

下吉田地区に人が住み始めたのは、縄文時代までさかのぼります。下吉田の北の境となっている尾垂山^{おたれやま}の沢沿いの南向きの緩斜面地に位置する尾垂大石久保遺跡^{おたれおおいしくぼ}から縄文土器が発見されています。詳細な年代や集落の有無は分かっていないため、今後の調査の進展が期待されます。その後、弥生時代～古墳時代までは遺跡が発見されていませんが、平安時代になると3つの遺跡が現れます。1つは、先ほどの尾垂大石久保遺跡と尾根を1つ隔てた沢沿いの南向きの緩斜面地に広がる尾垂石屋ヶ沢遺跡^{おたれいしやがさわ}から平安時代の器の破片が発見されています。また、宮川と入山川の合流点より下流の左岸（北側）において、平安時代末～鎌倉時代^{しょうかくきよう}の松鶴鏡^{きようぼう}が発見されています。これは、享保11（1726）年に富士見町の新田開発を行う中で大石を動かしたときに石の間から出てきたとされるものです。この大石は、富士見町を覆う剣丸尾溶岩と考えられますが、剣丸尾溶岩は10世紀後半～11世紀前半に噴出したとされ、松鶴鏡は12～13世紀のものとされるため、当地の人が溶岩上で何らかの祭祀をした跡であると推定されます。

同じ剣丸尾溶岩で覆われている御姫坂遺跡^{おひめざか}では、溶岩採石工事中に溶岩の下から平安時代の土師器が見つかっています。このように、平安時代～鎌倉時代になると下吉田地内で人々が生活していた痕跡が明確になるため、平安時代の9～10世紀には、下吉田に集落があったと推定されます。



平安時代の松鶴鏡
「甲斐国志編纂資料 明細書」
上書類 古文書之部
文化 11 (1814) 年以前
館保管



尾垂山の遺跡
「四ヶ村組合地里御書上絵図」
控
慶応 2 (1866) 年
館保管

2 湧水地への進出① 一鎌倉時代～室町時代（12～15世紀）一

新しい土地に住み始めるのに最初に必要となるのが水です。縄文時代～平安時代については、山の谷筋を流れる水を利用できる山すそに住むことが多く、下吉田の尾垂大石久保遺跡^{おたれおおいしくぼ}や尾垂石屋ヶ沢遺跡^{おたれいしがさわ}も同様の立地となっています。下吉田において山すそから平地に進出した際に、最初に住み始めたのは湧水地の周辺でした。平安時代の集落跡の可能性のある御姫坂遺跡^{おひめざか}は、溶岩で埋没しているため、詳細は不明ですが、御姫坂は乙女ヶ池という湧水があったことで知られるため、こうした湧水を生活用水としていたと推定されます。下吉田において江戸時代から知られる著名な湧水は、月江寺の池、小室浅間神社の北東の小字「法花堂」の池^{ほっけどう}（現、水上神社の池）です。江戸時代の地誌『甲斐国志』^{かいこくし}には、これらは河口湖の伏流水であると記され、伝承では、筒口神社（富士河口湖町船津）^{つつぐち}前の河口湖にある湖の水が抜けていく筒口と通じているとされます。これらの湧水の近くには、古文書等の記録から少なくとも室町時代には人々が住んでいたと考えられます。具体的には、室町時代の日記『勝山記』を執筆した僧の庵があったとみられる水上神社の池周辺、『勝山記』に「中村」・「川尻」・「尾垂」と地名が登場する小字「中村」（小室浅間神社と月江寺の門前）、小字「尾垂川尻」^{おたれかわじり}（小字「法花堂」の北側）があります。なお、中村にある宮守明神^{みやのかみしや}（現、子之神社）は、境内地に古池があり川も流れていましたが、富士山の山崩れで埋まったと伝わります。



月江寺と小字「法花堂」の池
「月江寺境内地絵図」
明治 5 (1872) 年
館保管



宮守明神（子之神社）と古池
「宮守明神由緒書」
明治元 (1868) 年
館保管



『勝山記』に記された下吉田
「年並記」
江戸時代
館保管

2 湧水地への進出② 一鎌倉時代～室町時代（12～15世紀）一

あずまちょう あいぜんじどうどう
東町の愛染地蔵堂前の湧水と宮川と桂川の合流点周辺の「こうがふち」・「ひさげふち」・「ニナカ池」も下吉田を代表する湧水地です。

愛染地蔵堂は、月江寺^{げっこうじ}の持堂で、文明 14 (1482) 年に造立された地蔵菩薩像を祀っています。湧水は、東側を流れる中沢川^{なかざわがわ}にあり、「精進場」や「精進ヶ池」^{しょうじんぼ}と呼ばれてきました。その名のとおりに身を清める場所であり、愛染地蔵堂前を通る富士道を歩く富士登山者たちは、この湧水で身を清め、山頂を目指しました。なお、中沢川は桂川から分流した用水路でもあり豊富な水が流れていますが、精進場と呼ばれていたのはこの川の水ではなく、この場所で湧き出していた湧水のことでした。中沢川の東側に沿って、5～7

世紀に富士山から噴出した^{ひのきまるび}檜丸尾第 1 溶岩の断崖が延びており、溶岩の下から湧水が出ていたとみられます。「こうがふち」などの湧水は、江戸時代から知られ、現在も豊富な湧水を生かして^{ようそんじょう}養鱒場が営まれています。これらの湧水がある宮川を望む高台に祀られているのが不盡未見地蔵です。当地は、下吉田の田辺家の始祖が^{やかた}館を構えた所とされ、ふじみ地蔵は、館の守本尊であったと伝わります。ここには田辺家の遠祖をまつる^{あらた}荒田八幡社がありましたが、明治時代に小室浅間神社参道沿いに移されました。当時の記録がなく詳細は不明ですが、高台で災害を避けることで、湧水もあるため、早くから居住されていた可能性があります。



愛染地蔵堂と富士道と中沢川
「明治六年第八月書上控」
明治 6（1873）年
館蔵



宮川と湧水
「新開場御高入倉絵図」
天保 14（1843）年
館蔵

2 湧水地への進出③ ―鎌倉時代～室町時代（12～15 世紀）―

愛染地蔵堂の南にある小字「友屋地」は、敷地が約 100m 四方ほどの屋敷跡と考えられています。友屋地の東には桂川から分流した中沢川が流れているだけでなく、^{ひのきまるび}檜丸尾第 1 溶岩の断崖沿いに位置しているため、湧水もあったと推定されます。中世の日記『勝山記』の天文 21（1552）年の条に「吉田の友屋」に「屋形の御蔵」が建てられたと記されており、様々な物資が流通する拠点であった可能性があります。友屋地の北にある小字「八重神」は、八重神の祠があったと伝わります。後に八重神は上吉田の諏訪神社に移されたといわれるとおり、現在は祠がありません。この八重神と北の^{しもはちおうじ}下八王子と南の^{かみはちおうじ}上八王子を合わせて金山八王神といいました。この三社に沿って、富士道が延びており、富士登山者が参拝していったと伝わります。なお、吉田の火祭で唱えられる祝詞「諏訪能宮^{スワノミヤ} 御影八重神^{ミカゲヤイヨウガミ} 左右神茂候^{サイソウガミモサウロウ} 実似茂候^{ゲニモサウロウ} 八重神茂候^{ヤイヨウガミモサウロウ}」の「左右神」は上八王子（左之社）と下八王子（右之社）を、「八重神」は八重神（中之社）を意味しているとされます。友屋地の西を通る富士道の辻には、^{げんき}元龜 2（1571）年の銘文をもつ六地蔵があり、小字が「古屋敷」であることから東町一帯が歴史ある地区ということが分かります。また、当地は小字「法花堂」にある^{ふくげんじ}福源寺の旧地であったとされ、享保 10（1725）年に現在地に移ったとされます。その後、福源寺の旧地には^{じょうどさんぶきょう}浄土三部経を埋納した塚が築かれたことから、旧地は「お経塚」と呼ばれています。



金山八王神と八重神
「金山八王神由緒」
明治元（1868）年
館保管



上八王子と下八王子と八重神
「上八王子・下八王子・八重神境内図」
明治時代
館保管



友屋地・八重神・八王子と用

水路

「雪代被害堰絵図」

宝暦5（1764）年

館保管

3 小林尾張守と弁天町① 一室町時代（15～16世紀）

下吉田南西に位置する「弁天町」は、市杵嶋神社（弁天神社）を中心とする町です。小字は「新屋敷前」ですが、その歴史は室町時代までさかのぼります。そのため、昭和20年代に弁天町となるまでは、「古屋敷」と呼ばれていました。この弁天町に屋敷を構えていたのが郡内（山梨県都留郡）領主の小山田氏の家老として活躍した小林尾張守です。小林尾張守は元々、船津（富士河口湖町）の河口湖畔に屋敷を構えていました。現在、屋敷跡には河口湖ホテルが建っており、小林尾張守の屋敷神であったと伝わる御屋敷大神社が鎮座します。

15世紀末から記録に登場し始める小林尾張守が船津から吉田（富士吉田市）に進出するにあたって拠点としたのが弁天町です。弁天町に屋敷を構えたのは16世紀中頃とされます。小字「新屋敷前」の「新屋敷」は小林尾張守が新たに屋敷を建てたことに由来すると伝わります。屋敷の規模は不明ですが、小字「新屋敷前」は長軸320m、短軸200mの範囲に広がります。北の境には、雪代（土石流）が流れ下る宮川があります。昔、宮川は弁天町より上流側では水がほとんど流れず、弁天町あたりで水が流れるようになりました。それは、弁天町近くの宮川沿いで湧水が出始めることや上吉田や松山を通過した用水路が弁天町を経て宮川に流れ込んだためです。このように弁天町は水に恵まれた地域であり、宮川をはさんで西側までしか剣丸尾第1溶岩に覆われていなかったため、開発に適した地域でした。

3 小林尾張守と弁天町② 一室町時代（15～16世紀）

弁天町の宮川沿いに境内地がある市杵嶋神社は、小林尾張守が河口湖の鵜の島に祀っていた弁天を、弁天町に屋敷を構えるにあたって鬼門除けとして勧請したものとされます。小林尾張守は、江戸時代の記録によれば、16世紀に下吉田の田畑を開墾し、尾垂山から田畑の肥料にする草を採取するとともに、家臣に命じて下吉田の字「下の水」（現、富士見町）を開墾し、畑にしたとされます。永禄2（1559）年の正月に雪代（土石流）が発生し、田や家を全て押し流してしまった時には、小山田氏の命により小林尾張守が奉行となって、小室浅間神社沿いの宮川の堤防工事を行います。また、天文19（1550）年にも場所は不明ですが、堤防工事を行っています。このように下吉田は、雪代の常襲地帯であったため、弁天神社も江戸時代の天保5（1834）年の雪代で、社殿などが押し流されています。雪代が度々流れ込む宮川の堤防工事を任された小林尾張守が、屋敷地内に水の神である弁天を祀ってきたのは、雪代災害を防ぐ願いもあったと考えられます。現在の社殿は富士山を背にして北向きに祀られていますが、かつては宮川を背にして東向きに祀られていたことにもそうした願いが込められていたのでしょう。

天正10（1582）年、武田家が滅亡し、小林尾張守も運命を共にし、屋敷から去ります。その後、市杵嶋神社は弁天町の人々により大切に祀られてきました。



市杵嶋神社の鎮座地
「明治六年第八月書上控」
明治 6 (1873) 年
館蔵



市杵嶋神社と雪代
「新屋敷組鎮守由緒書上帳」
明治元 (1868) 年
館蔵



下吉田の湧水と井戸
「河口湖引用及伏流ノ図」
明治末～大正初め
館蔵

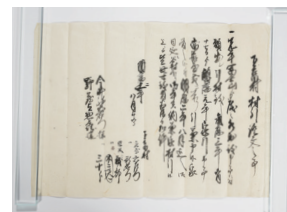
4 下吉田の湧水と用水路

下吉田は豊富な湧水があるため、12～16世紀の鎌倉時代から室町時代にかけて、人々は湧水地周辺に集落をつくり、湧水を生活用水や農業用水として活用することで暮らしを営んできたと考えられます。ただ、下吉田の湧水地の多くは平地にあり、富士山で発生する雪代（土石流）災害で被災する可能性が常にあるため、堤防を築くなどの雪代対策が欠くことのできないものとなります。

14～16世紀になると下吉田の南の上吉田地区において、湧水や川の近くではなく、川から用水路を延ばすことで、多くの富士登山者を泊めることができる宿場町が整備されていきます。それが、14～15世紀に町ができたと推定される「古吉田」と元亀3（1572）年に古吉田の町を移転し新たに整備された「上吉田」です。古吉田と上吉田は桂川から水を引くことで、水のない平地に町を造ることに成功しました。下吉田の人々は、上吉田まで延びた用水路をさらに延長するか新たに桂川から用水路を延ばすことによって、町を拡張することを試みます。それが、見事な形で結実したのが、富士山が通りの真正面に見えるようにした現在の本町通りです。本町通りが整備されたのは、残された記録から明暦元（1655）年～明暦2（1656）年とされますが、詳細は謎に包まれています。この本町通りを中心に下吉田には用水路が網の目のように延び、「富士山と水の町」という名がふさわしい町並となっています。



桂川と中沢川の用水路
「桂川水系用水路絵図」
昭和前期
館蔵



本町通りの成立
「下吉田村引証文之事」
明暦 2 (1656) 年
館保管



下吉田の用水路
「下吉田村絵図」
明治 7 (1874) 年
館蔵



絵葉書「吉田中村ノ富士」
大正 2 (1913) ～大正 5 (1916)
年
推定撮影地：現、本町 2 丁
目交差点南／館蔵



絵葉書「都留馬車鉄道会社
前宮川橋上ヨリ富士の遠望」
大正 2 (1913) ～大正 4 (1915)
年
撮影地：宮川橋の上／館蔵



月江寺境内地（現、富士学
苑高等学校）の松林
昭和 10 (1935) 年
館蔵



小室浅間神社
（南東から撮影）
大正時代～昭和時代初め
館蔵



小室浅間神社と宮川
（南東から撮影）
明治 33 (1900) 年
小室浅間神社上棟祭記念
館蔵

5 下吉田の寺院の歴史① 一室町時代～江戸時代（14 ～ 19 世紀）

下吉田は、これまで紹介してきたとおり、複数の湧水地を中心に集落が形成されてきましたが、その核となってきたのが寺院と神社です。寺院は月江寺・福源寺、神社は小室浅間神社・天神社・山王社・福地八幡社などは、その歴史をさかのぼると、湧水地や用水路と深く結びついてきたことが見えてきます。

●月江寺

月江寺は、臨済宗寺院です。その始まりは、由緒書によれば、日本武尊が上吉田の北口本宮富士浅間神社で祈願をした時に当地に開いた「山の寺」という庵とされます。その後、貞観 6 (864) 年に移転し、貞永年中 (1232 ～ 1233) に寺院名を富士山別当称光院（天台宗）に改めたとされます。なお、起源の地には後に仁王門が建立され、月江寺が所持してきましたが、明治の廃仏毀釈で失われ、現在は「仁王門跡」として礎石のみ残ります。称光院はその後廃絶しますが、この再興をしたのが、月江寺の開基である絶学祖能でした。絶学祖能は、上吉田にあった壊れた小庵を再建します。これが祥春庵です。絶学祖能は、称光院を再興するために、祥春庵を拠点にして、富士登山者へ勧進します。そして、応永 2 (1395) 年に称光院の再建を成就し、寺院名を月江庵に改めます。これが月江寺の開山であり、宗派も臨済宗となります。このように月江寺は、応永 2 (1395) 年の開山まで上吉田の歴史と深くかかわっており、江戸時代までは上吉田に七ヶ寺の末寺がありました。

5 下吉田の寺院の歴史② 一室町時代～江戸時代（14 ～ 19 世紀）

●月江寺（続き）

絶学祖能が月江寺を開山して以降は、月江寺は下吉田にあったと考えられます。由緒書によれば、現境内地とは異なる地であったとされ、一説には「白蓮の池」の前であったとされますが、池の場所も含め定かではありません。また、愛染地藏堂が月江寺の旧境内地であったとの伝承もあります。現境内地へ移転した時期も定かではありませんが、由緒書の 1 つには、元亀 3 (1572) 年に移転したとあり、渡辺一族と萱

沼一族で溶岩に覆われた土地を平坦に造成し、堂宇を整えたとあります。いずれにしても、^{けいあん}慶安 2（1649）年に現境内地に相当する範囲を御朱印地（寺社が所持する土地）として三代将軍徳川家光から承認されるより前には、現境内地に堂宇が整えられていたと考えられます。なお、^{じょうきよう}貞享 4（1687）年の『一宮巡詣記』という記録に「月江寺といへり、自然山に岩ほ幾重も畳あげ、入江に臨めば、誠に月の比思火やられ待る、^{くれ}暮まで遊び帰りぬ、とふ人の 心の水も すまざらん 絶ぬ光の 月の江の寺」と現境内地のことが記されています。このように月江寺の池は月が写りこむ湧水地として知られ、寺院名「月江寺」と山号「水上山」の由来ともなっています。この月江寺の湧水は、月江寺が当地に移転する前から「中村」に居住する人々にとって大切なものであったはずであり、こうした歴史をふまえて、月江寺は現在地へ移転したと考えられます。



月江寺の境内地
「月江寺境内地絵図」
明治 5（1872）年
館保管



月江寺の移転
「水上伝統録」
江戸時代
館保管

5 下吉田の寺院の歴史③ 一室町時代～江戸時代（14～19 世紀）

●^{ふくげんじ}福源寺

福源寺は、浄土真宗寺院です。現在は、小字「^{ほつけどう}法花堂」にありますが、^{きようほう}享保 10（1725）年までは小字「古屋敷」にありました。なお、移転前の小字「法花堂」は、福源寺の墓地であったと伝わります。福源寺の創建は不明ですが、元来は真言宗寺院であったのが、15 世紀後半に下吉田の渡辺伊賀守の跡継ぎが浄土真宗中興の祖である蓮如上人に皈依し、法名を浄光とし、聖徳山福源寺に改号したと伝わります。福源寺には、15 世紀ころの仏画が伝来しており、浄土真宗に改宗した際に整えられた可能性があります。また、聖徳太子が富士山から自画自賛の三軸の掛軸を投げた時に、その一幅が落ちたのが福源寺の旧境内地とされ、これを祀ったのが福源寺の前身とされます。

福源寺が同じ森組である東町から宮下町へ移転した目的は定かではありませんが、17 世紀に本町通りに現在の町並が整備され始めた中で、各湧水地を中心に分散して居住していた人々が本町通りに移転し始めたため、より人口の多い地区へ境内地を移し、下吉田の新たな信仰拠点となることを目指した可能性があります。

寺院全体でみると、月江寺が 16～17 世紀に、福源寺が享保 10（1725）年に中村に移転することで、月江寺が本町通りの西の境、福源寺が北の境となり、本町通りの軸線や範囲が明確になっていったと考えられます。



月江寺と福源寺の移転
「下吉田村三度之移住之図」
江戸時代
館保管

6 下吉田の神社の歴史① 一室町時代～江戸時代（14～19世紀）

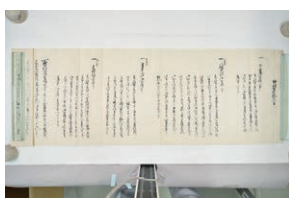
●小室浅間神社

小室浅間神社は、下吉田の氏神で「下宮」ともいいます。かつては、下吉田・上吉田・松山の産土神であったとされるように、下吉田と上吉田が「吉田」と呼ばれていた江戸時代より前の歴史を色濃く伝える神社です。また、重要な祭礼として、1月14日の筒粥神事と9月19日の流鏝馬祭がありますが、前者は作物や富士登山者の豊凶、後者は火事の有無を占うことを特徴とします。筒粥神事については、中世の日記『勝山記』の永禄3（1560）年の条に「ツ、カイ」と記されており、小室浅間神社の歴史や祭事が16世紀までさかのぼることが分かります。江戸時代、流鏝馬祭後の直会の席次は芝座と呼ばれ、厳密に定められていました。その記録によれば、下吉田の古くからの地区である森組から4名、上組から4名の計8名が列座しており、下吉田全体の祭礼として重視されてきたことが分かります。

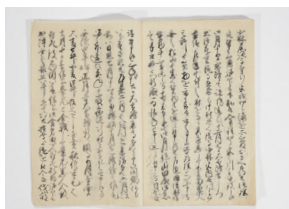
小室浅間神社は背後に剣丸尾第1溶岩の断崖があります。また、正面には月江寺の湧水など近隣の複数の湧水が流れ込む宮川が流れ、東の小字「法花堂」には水上神社の湧水があるなど溶岩と湧水に囲まれており、鎮火を祈願する浅間神社にふさわしい立地となっています。往古は愛染地蔵堂の東に鎮座する金毘羅神社の地にあったと伝わりますが、記録はなく、詳細は分かっていません。



小室浅間神社と宮川と湧水
「小室浅間神社境内図」
明治5（1872）年
館保管



下吉田の神社
「神社古例証文之事」
安永9（1780）年
館保管



『勝山記』に記された下吉田
「年並記」
江戸時代
館保管



小室浅間神社の祭神
「富士下宮社地取調書上帳」
明治元（1868）年
館蔵

6 下吉田の神社の歴史② 一室町時代～江戸時代（14～19世紀）

●天神社と山王社

天神社は中央区の天神の森にあります。江戸時代の地誌『甲斐国志』には「天満宮」とあります。下吉田の萱沼イッケシ（一族）で祀ってきたことから萱沼天神とも呼ばれます。現在は、幸町と中央区の自治会で祭礼を行っています。当初の境内地は小字「梅ノ木」でしたが、後に現在の小字「天神下」に移ったとされますが、少なくとも18世紀には現在地にあったことが分かっています。現境内地は、古くは「山王の森」と呼ばれ、天神社が移ってくる前から、山王社が祀られてきました。

小室浅間神社の流鏝馬祭で、この山王社の例祭が執り行われます。この祭礼は、流鏝馬奉納の前日である9月18日に、山王社奉幣使として神職と流鏝馬奉仕者が、小室浅間神社から山王社へ向かって出発し、山王社の祭礼を終えると小室浅間神社へ戻るものです。また、9月19日の流鏝馬祭の最後に馬場を馬が走り去る役を「山王馬」と呼ぶように流鏝馬祭において山王社は重要な信仰対象となってきました。流鏝馬祭は、江戸時代の地誌『甲斐国志』によれば、吉田口登山道の馬返し周辺の驢馬場と呼ばれるところで行っていたのが、後にこれを止めたため、勝山（富士河口湖町）の富士御室浅間神社と下吉田の小室浅間神社が各社で流鏝馬祭を行うようになったとされます。また、天神社・山王社の東を昔の富士道は通って

いたとされるなど、天神社と山王社は富士山信仰とも深く関係しています。

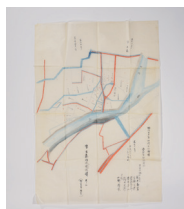
6 下吉田の神社の歴史③ 一室町時代～江戸時代（14～19世紀）一

● 福地八幡社

福地八幡社は仲町の小字「古森」にあり、渡辺イツケシ（一族）で祀る神社です。渡辺綱を祀ることから渡辺大明神ともいい、下吉田の渡辺姓の多くが氏子となっています。その数は1,200戸にもなるとされます。後に下吉田村の神社であった八幡宮に合祀したことから、福地八幡宮渡辺大明神とも称しました。

渡辺大明神の由緒によれば、嵯峨天皇（786年生－842年没）の子孫である渡辺家の先祖は、当地に来て、周辺を開墾し、田んぼを造り、屋敷を構えました。6人の息子は、源頼光（948年生-1021年没）が足柄山にきた時にお供をしていた渡辺綱より渡辺姓を賜り、渡辺綱を渡辺大明神として祀ってきたとされます。もとは森（東町）の方にあり「シャグチ明神」と称したと伝わることから、東町と仲町の境を流れる「三愚神川」付近に鎮座していたのかもしれませんが。

福地八幡社は、境内地内には近年まで湧水があり、生活用水や農業用水として使われるなど、水に恵まれた場所です。また、度々、雪代が流れ下る宮川と間堀川が目前で合流する場所であり、合流して勢を増す雪代から森組（仲町・西町・東町）を守るような立地にもなっています。なお、南側の小字は「的場」であり、神社の西側を富士山に向かって延びる間堀川は、往古は流鏑馬の馬場であったとも伝わります。



福地八幡社と湧水
「字古森湧水関係図」
明治20（1887）年
館蔵



下渡辺大明神と渡辺一族
「渡辺縁起」
安永10（1781）年
館保管

7 溶岩台地の開発 一江戸時代（17～19世紀）一

市内では、17世紀末になると、今まで居住することが困難であった溶岩台地を整地し、用水路を引くことで、農地や居住地を開発する新田開発が盛んになります。下吉田においても、18世紀前半に下新田（現、富士見町）の新田開発が始まります。開発理由は、屋敷が増え、野菜を作る畑も確保できず、新たに家を建てる場所もないため、新たに剣丸尾第1溶岩で覆われた台地を約11ヘクタール開発したいというものでした。この新田開発は、江戸時代を通じて行われ、最終的に約14ヘクタールの宅地と農地を開発したとされます。なお、用水路の水源は、湧水が集まる宮川、宮川に合流する入山側、水上神社の湧水地に求めました。

下新田の第1期の開発を終えたのが享保16（1731）年とされますが、この頃に伊勢神宮から勧請した御神体を下新田の北端に祀ります。これが、現在の富士見町の大神社です。この時に、下吉田の南端にも同じ御神体を祀ります。これが、現在の曙町の大神社です。曙町は御茶屋町と合わせて新屋敷と呼ばれましたが、その名のとおりに新しくできた町になります。詳細は不明ですが、下新田と同時期に開発されたと考えられます。こうして18世紀前半に2つの大神社が祀られたことで、本町通りを中心に拡張を続け

てきた下吉田の南北の境が確定します。

この溶岩台地開発の歴史は、1950 年代以降、緑ヶ丘・竜ヶ丘・西丸尾・ときわ台の開発へと受継がれていきます。



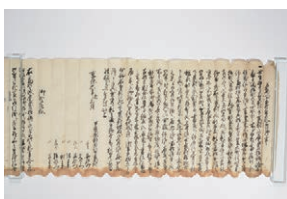
下新田（富士見町）の溶岩
台地
「下吉田村絵図」
享保年間（1716 ～ 1736）
館保管



下新田（富士見町）と用水路
「下吉田村普請ヶ所絵図」
江戸時代
館保管



下新田の大神社と道
「道路修繕略図」
明治 13（1880）年
館蔵



下新田の開発
「新屋敷開発につき許可方願
書控」
享保 6（1721）年
館保管

8 富士山の水と水掛麦と雪代 —江戸時代（17 ～ 21 世紀）—

市内では、富士山の豊富な水を畑にかけ流しにすることで大麦と小麦を育てる水掛麦が昭和初めまで盛んに行われてきました。下吉田は江戸時代、畑の半分が水掛麦であり、水掛麦の耕作面積は市内一でした。水掛麦は、水温が常に 12 度前後である桂川の水を畑に流すことで、麦が凍ることや雪で埋もれることを防ぐことができ、水に含まれる成分で育つため肥料がいらず、通常の麦畑よりも収量が多いという利点があり、本市の特産品として広く知られてきました。なお、江戸時代までの本市の田畑の割合は、田 15%、畑 85%で、下吉田は田 30%、畑 70%でした。この重要な食料である水掛麦やその他の田畑の脅威となってきたのが、富士山の雪代でした。

雪代は、富士山の雪が春先に解けて、土砂と共に一気に流れ下る土石流のことです。富士山では毎年発生しており、麓の田畑や用水施設を襲う雪代も数年に 1 回は起きていました。その中でも、天保 5（1834）年の雪代は、記録に残る雪代災害としては最大規模のものであり、下吉田は全戸の 10%が失われ、田畑の半分以上が埋まりました。このように富士山がもたらす豊富な水は、時に雪代となって川や堀（沢）を流れ下り、そこから用水路へ入り込み、用水施設を破壊し、田畑を埋めました。そのため、下吉田の人々は、堤防を築くなど常に警戒を怠らないだけでなく、17 世紀から雪代の被害を受けにくい織物や養蚕にも力を注ぐようになります。



雪代と水掛麦と堤防
「下吉田村雪代絵図」
天保 14（1843）年
館蔵



昭和 36（1961）年の雪代で
あふれる宮川
宮川の銀座橋を上流側から
撮影
館蔵



昭和 36 (1961) 年の雪代で
埋まった宮川
宮川の銀座橋から上流側を
撮影
館蔵

9 富士山の水と織物① ―江戸時代～現代 (17～21 世紀)―

江戸時代、郡内^{ぐんない} (山梨県都留郡) の絹織物は、郡内縞・郡内絹・郡内織 (以下、郡内織と記す) と呼ばれる一大ブランドで、江戸を中心に高い人気を得ていました。当時の記録『稽古談^{けいこたん}』は、郡内織が優れているのは富士山の水が素晴らしいためとし、次のように紹介しています。「雪ノ水ユヘコノ上モ無^{なく}潔^{きよ}也。コノ水ニテ蚕^{かいこ}を烹^にル。凡^{およそ}水ハコノ水^{ばかり}計^じ也。ユヘニ郡内ノ絹ハ光リアリテ、地合他国ノ絹トハ大キニ違フ也。」

また、明治 35 (1902) 年の『山梨県機織業調査報告書』は、「山梨県機織地^{てんよ}ニ天与サレタル水利ハ実ニ天下ニ冠絶ス、是迄諸国ニ於テ甲斐絹織ヲ似真タルコトニシテ足ラズト雖、皆失敗ニ歸セシヲ見ルモ明白ノ事ニ属ス^{しきたく}」とし、甲斐絹織 (郡内織) を他地域で織ろうとしても水が違うので失敗してしまうとし、織物の「品位色沢」における水の影響の大きさを説いています。

織物は、蚕を煮て糸を取る「製糸」、水に浸した糸を巻き取りながら撚る「撚糸^{ねんし}」、セッケン・ソーダ類を入れた水で煮沸して糸のたんぱく質を落とす「精練^{せいれん}」、水と染料で糸を染めて水でよくすすぐ「染色」というように各工程において水が欠かせないものとなっています。下吉田を含め本市では生活用水のための用水路が町中に張り巡らされています。そのため、織物は各家で行うことが可能であり、江戸時代に下吉田では 8 割以上の家で機織りに携わり、その生産量は市内一でした。

9 富士山の水と織物② ―江戸時代～現代 (17～21 世紀)―

明治 20 (1887) 年ごろ、人力以外の動力を用いる力織機^{りきしよつき}という織機が市内で初めて導入されます。その後、明治 45 (1912) 年までの間に力織機の数徐々に増えていきますが、その動力となったのが水力でした。水車を造り、町中を流れる用水路の水を引き込み、力織機を動かしました。水車の導入は撚糸業^{ねんし}でも進み、明治 30 (1897) 年～大正 8 (1919) 年にかけて、多数の撚糸工場が開業します。

市内の織物業に電力が導入される画期になったのが、大正 2 (1913) 年の宮川電燈^{みやがわでんとう}の営業開始でした。宮川電燈の社は下吉田の本町通りにあり、発電所は宮川が桂川と合流する手前の宮川左岸 (下吉田字深山^{みやま}) にありました。この発電所は、剣丸尾第 1 溶岩の断崖直下に立地しますが、周辺から湧き出る湧水と宮川の水を利用し水力発電を行いました。開業当初の宮川電燈は、主に周辺の家々に電燈用の電力を供給しましたが、大正 7～8 (1925～26) 年に力織機^{けんまるび}の数が急増する中で、その動力として同社の電力が利用されるようになります。そして、大正 10 (1921) 年には、宮川と桂川の合流点の少し下流側に第 2 発電所が整備され、発電を開始します。こうして富士山の豊富な水が、動力の面でも織物産業を支えていくようになります。また、生産量が増えていく織物を運ぶ上で、活躍したのが明治 33 (1900) 年に籠坂～下吉田間で開通した都留馬車鉄道でした。本社は宮川電燈と同じ建物内にありました。



下吉田村から瑞穂村へ
「山梨県南都留郡瑞穂村地形
図・村勢要覧」
大正 11（1922）年
館蔵



本町通りと宮川橋
「五月 しもよしだ 宮川
橋」田中茂太郎『真写富士
百図』
明治 31（1898）年／館蔵



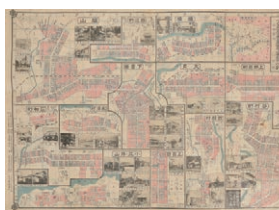
用水路と水車
「下吉田用水絵図」
明治末～大正初め
館保管



都留馬車鉄道のルート
「都留馬車鉄道特許布設特許
願」
明治 29（1896）年
館蔵



瑞穂村を走る都留馬車鉄道
「瑞穂坂を下りて」杉浦非水
『富士山スケッチ』
明治 41（1908）年
館蔵



大正時代の下吉田の町
「大日本職業別明細図之内
山梨県」
大正 15（1926）年
館蔵



伸びよ！大吉田市へ！！
昭和 26（1951）年
館蔵



宮川電燈株式会社電柱工事
（本町二丁目交差点を南から
撮影）
大正元（1912）年
館蔵



宮川電燈株式会社開業式
（本町二丁目交差点を南から
撮影）
大正 2（1913）年 4 月 27 日
館蔵



**宮川電燈株式会社第 1 発電
所竣工**
明治 45（1912）年
館蔵



**宮川電燈株式会社第 1 発電
所放水路**
明治 45（1912）年～大正 2
（1913）年
館蔵



都留馬車鉄道と本社
明治 45（1912）年～大正 2
（1913）年
本町通り西側（月江寺大門
商店街入口より南側）
館蔵

しもよしだ 下吉田の概要

下吉田は、富士吉田市の中央部で、市街地は標高 700 ～ 800m に広がります。北は尾垂山^{おたれやま}を境として上暮地^{かみくれち}と接し、東は桂川^{かつらがわ}を境として大明見^{おおあすみ}・小明見^{こあすみ}と接し、南は用水路「大溝」^{おおみぞ}を境として上吉田と接し、南西は松山と接し、西は富士山から噴出した剣丸尾溶岩流を境として新倉^{あらくら}に接します。下吉田を流れる川は宮川^{みやがわ}と間堀川^{まぼりがわ}の 2 本ありますが、江戸時代にはそれぞれ大ホリ、東カラ堀と呼ばれていたように水は流れず、富士山で発生した雪崩^{なだれ}が土砂を巻き込んで市街地を襲う雪代^{ゆきしろ}と呼ぶ土石流が流れる沢でした。ただ、宮川については、下吉田中心部に入ると、下吉田地内の各所で湧き出す水や地区内を流れる用水路が合流して川になっていきます。そして、大正 7（1918）年に河口湖の水を流す「うそぶき放水路」が完成し宮川に合流するようになると、現在のように多量の水が流れるようになりました。

現在、町の中心部は国道 139 号線沿いで本町通り^{ほんちょう}と呼ばれます。本町通りを中心にこれに並行する西裏通り^{にしうら}と、この両者を東西に結ぶ中央通り^{げっこうじ}と月江寺通りなどに商店街が形成されています。下吉田は織物の市^{ぐんない}がたち、かつては馬車鉄道や路面電車、現在は富士急行線が通るといように市内はもちろんのこと郡内（山梨県北都留郡・南都留郡）を代表する町場です。そのため、現在も市役所・銀行・商工会議所・市民会館・図書館・新聞社・放送局など多くの施設や機関が集中しています。

市内は標高が高く平均気温が低いため、稲作が困難な地域であり、下吉田では耕地全体の 3 割が田、7 割が畑でした。ただ、市内の東側を流れる桂川から延ばした用水路で豊富な水を引くことができたため、水をかけ流しにする水掛麦^{みずかけむぎ}を畑の半分以上で行っていました。このように稲作が困難であったため、下吉田も市内の他の地区と同じく江戸時代から織物が盛んに行われてきました。江戸時代、下吉田では 8 割の家が織物を行い、その生産量は市内一であり、郡内でも有数の産地でした。

しもよしだ 下吉田の地区名

下吉田の範囲は、江戸時代の下吉田村の範囲と重なります。下吉田村は、郡内（山梨県都留郡）最大の村であったため、江戸時代には大きく森組^{もりぐみ}と上組の 2 つの組に分かれ、各組から名主を出していました。江戸時代中・後期の 18 ～ 19 世紀になると、人口が増え、新たな農地の開発も進んだことから、森組は中村組（現、本町 1 ～ 3 丁目・泉町・しんや）と大森組（現、東町^{あずまちょう}）・中町組（現、仲町）・西町組（現、西町）・法華堂^{ほっけどう}（現、宮下町）に、上組は古屋敷組（現、弁天町）と新屋敷組（現、曙町^{あけぼのちょう}・御茶屋町）で構成される上組（新屋敷組）と、上中組（現、幸町^{さいわいちよう}）と下中組（現、中央区）で構成される中組へと組が分かれていきます。さらに、18 世紀に新田開発された新田組（現、富士見町）も加わります。現在、これらの各組の範囲が自治会に受継がれており、各組で祀ってきた道祖神なども自治会で祀っています。

1950 年代以降になると、富士山の溶岩で覆われた台地の開発が進み、緑ヶ丘^{たつがおか}・竜ヶ丘^{にしまるび}・西丸尾・ときわ台などの地区が成立します。

組 名		現在の町名
森組	森（横町）	大森組 東町 ※昭和 24、25 年に改称
		中町組 仲町
		西町組 西町
	法華堂	
	中村組	
上組	中組	上中組 幸町 ※昭和 24、25 年に改称
		下中組 中央区 ※昭和 24、25 年に改称
	上組（新屋敷組）	古屋敷組 弁天町 ※昭和 24、25 年に改称
		新屋敷組 曙町 ※昭和 24、25 年に改称
	御茶屋町	
新田組（下新田）		富士見町

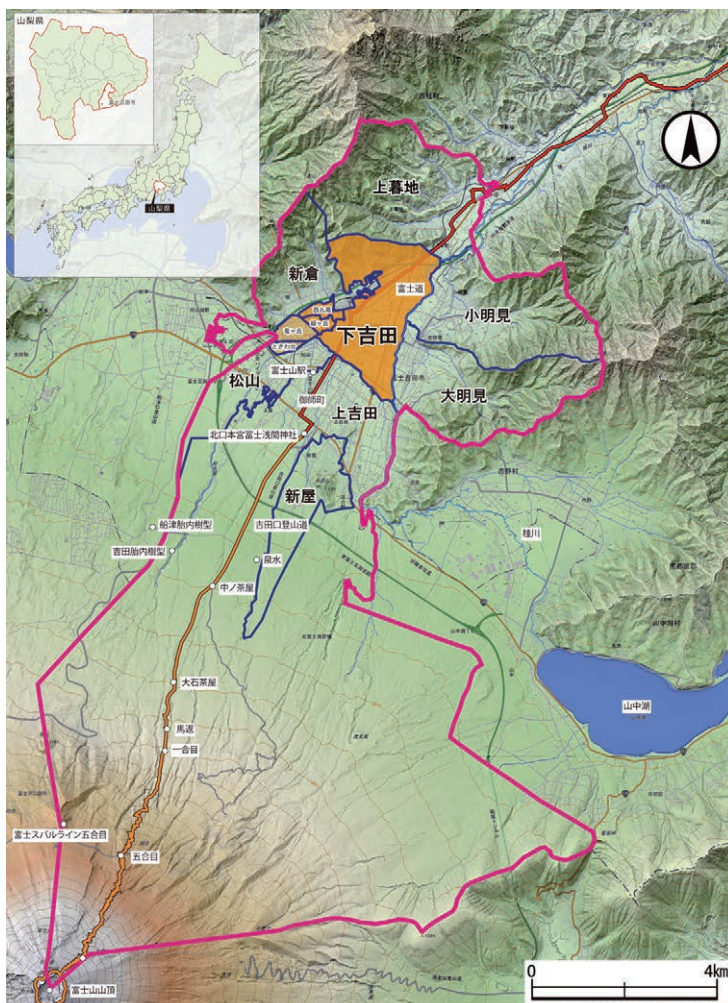
よしだ しもよしだ かみよしだ 吉田と下吉田と上吉田

吉田は、富士吉田市域を表す地名ですが、15 世紀には使われていました。この頃の「吉田」は上吉田（当時の古吉田のこと）を指して用いられることが多く、諏訪神社を「吉田取訪大明神」（明応 3（1494）年）、正覚庵を「吉田正覚庵」（明応 5（1496）年）、上行寺を「吉田上行寺」（明応 8（1499）年）というように上吉田に所在する寺社に吉田を冠している事例が目立ちます。

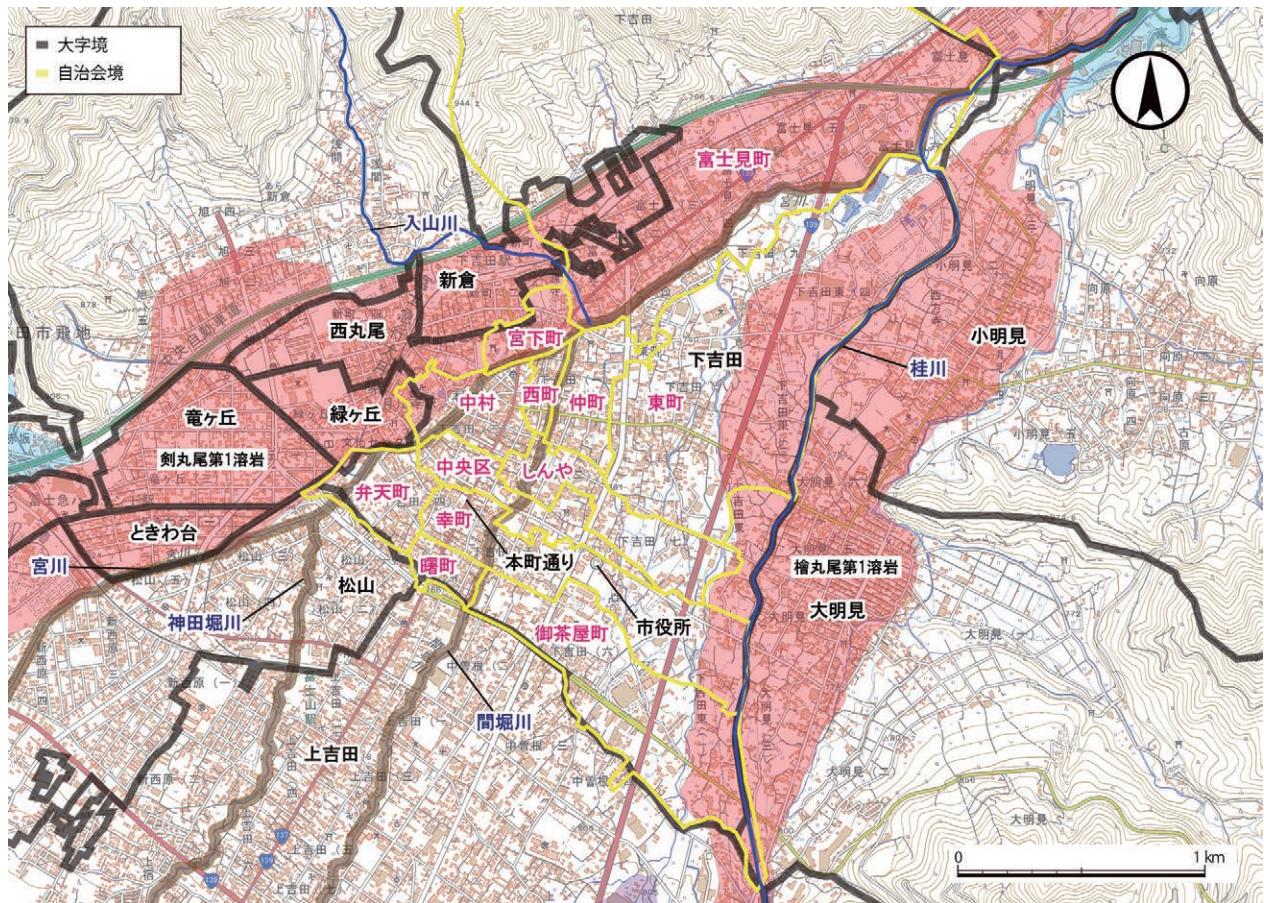
このように 1400 年代の記録では、吉田と記すだけなのですが、天文 2（1533）年に「下吉田」と「上吉田」という地名が初めて登場します。

そして、これ以降「下吉田」と「吉田」（上吉田）や、「下吉田」と「上吉田」というように、吉田の中の大きな町である上吉田と下吉田を分けて呼ぶようになります。また、弘治 2（1556）年には、下吉田の「下吉田衆」は郡内領主小山田氏の家老の小林和泉守と、上吉田の「吉田衆」は同家老の小林尾張守とそれぞれ対立し、裁判に訴え、自分たちの主張が正しいという裁許を武田氏や小山田氏から得ています。このように下吉田と上吉田の人々は、領主たちと集団となって交渉しており、下吉田と上吉田が自治的な町となっていたことが分かります。

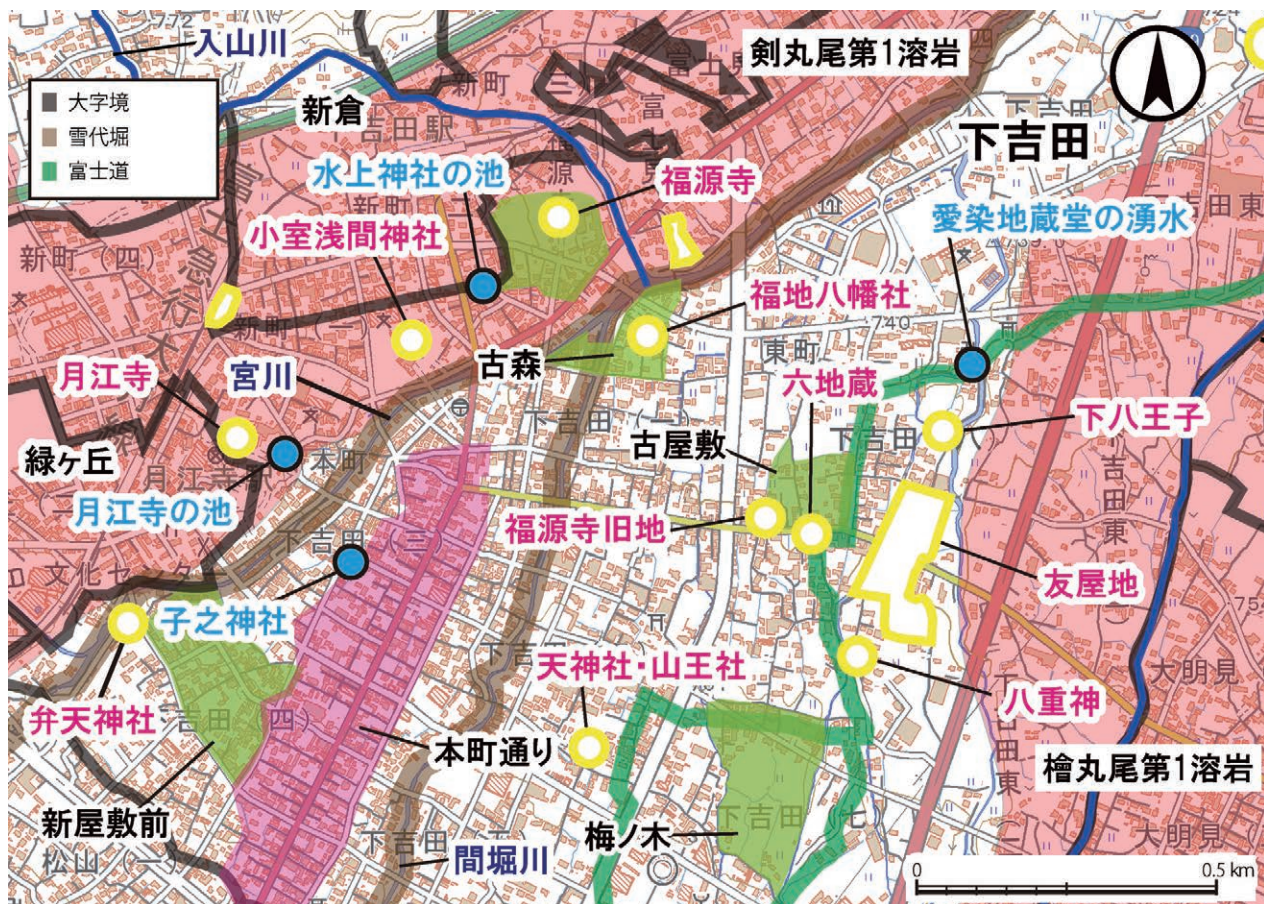
なお、記録が少ないため、下吉田と上吉田が実際にはいつから別々の町とされるようになったのか明らかではありませんが、当時の上吉田が古吉田に町があったように、下吉田も、町の中心は本町通りではなく、現在の東町（小字地蔵堂、友屋地、古屋敷）、弁天町（小字新屋敷前）、中村（小字中村）、宮下町（小字法花堂）などに広がっていました。



下吉田の位置 ※『地理院地図（新版）』をカシミール 3D スーパー地形セットで加工し作成



下吉田の自治会の範囲 ※『地理院地図（新版）』に加筆して作成



下吉田の寺院と神社 ※『地理院地図（新版）』に加筆して作成

参考文献

- 『甲斐国志』（文化 11（1814）年編さん）・『上吉田村甲斐国史原稿』個人蔵・『甲斐国 社記・寺記』（明治元（1868）年編さん）
- 市村隆男『吉田あるきであんなことこんなこと』粟井英朗環境財団
- 伊藤堅吉 1952『河口湖畔船津今昔物語』井出公済
- 犬飼顕澄 1986「吉積山西念寺文書－西念寺御朱印地と門前について－」『富士吉田市史研究』創刊号
- 小笠原輝 2019「富士山の雪代災害とその記述頻度の検討」『生態人類学会ニュースレター』25
- 月江寺学術調査会 2009『月江寺の什宝』
- 御更衣祭記念誌編集委員 2011『平成 22 年 御更衣祭記念誌』小室浅間神社
- 齋藤康彦 1990「明治前期に於ける郡内地域の産業構造」『富士吉田市史研究』5
- 齋藤康彦 1998「鷺見基助『山梨県機織業調査報告書』」『富士吉田市史研究』13
- 篠原武 2015「富士山の雪代災害について－富士吉田市を中心に－」『雪解流』36
- 白井茂樹 1991「『地域型』電燈会社の事業展開－宮川電燈株式会社を素材として－」『富士吉田市史研究』6
- 田嶋悟 1991「富士吉田市域における水力動力と電力の普及」『富士吉田市史研究』6
- 橘三喜『一宮巡詣記抜萃』（佐伯有義校訂 1907『神祇全書』第 2 集所収）
- ふじさんミュージアム 2022『富士山登山口上吉田と吉田胎内の歴史』
- ふじさんミュージアム 2023『MARUBI ふじさんミュージアムだより』48
- 富士吉田市東町老人クラブ 2012『東町の昔を訪ねる』
- 富士吉田市史編さん室 1979『富士吉田市史 行政編』上巻
- 富士吉田市史編さん室 1979『富士吉田市史 行政編』下巻
- 富士吉田市史編さん室 1990『市史民俗調査報告書第 10 集 下吉田の民俗』
- 富士吉田市史編さん室 1991『富士吉田市史資料叢書 9 富士吉田市史新聞記事索引』
- 富士吉田市史編さん室 1998『富士吉田市史 資料編』第 1 巻 自然・考古
- 富士吉田市史編さん室 1992『富士吉田市史 史料編』第 2 巻 古代・中世
- 富士吉田市史編さん委員会 1994『富士吉田市史 史料編』第 3 巻 近世Ⅰ
- 富士吉田市史編さん委員会 1994『富士吉田市史 史料編』第 4 巻 近世Ⅱ
- 富士吉田市史編さん委員会 1993『富士吉田市史 史料編』第 6 巻 近・現代
- 富士吉田市史編さん委員会 1995『富士吉田市史 史料編』第 7 巻 近・現代
- 富士吉田市史編さん委員会 1996『富士吉田市史 民俗編』第 1 巻
- 富士吉田市史編さん委員会 1996『富士吉田市史 民俗編』第 2 巻
- 富士吉田市史編さん委員会 2000『富士吉田市史 通史編』第 1 巻 原始・古代・中世
- 富士吉田市史編さん委員会 2001『富士吉田市史 通史編』第 2 巻 近世
- 富士吉田市史編さん委員会 1999『富士吉田市史 通史編』第 3 巻 近・現代
- 富士吉田市歴史民俗博物館 2004『手機のあるくらし』
- 富士吉田市歴史民俗博物館 2005『『甲斐国志』富士山北口を往く』
- 富士吉田市歴史民俗博物館 2009『月江寺展－富士北麓 禅の美術－』
- 舟久保兵部右エ門 1987『富士吉田の文化財（その 25）吉田風土記』富士吉田市教育委員会
- 増田昭子 1987「水かけ麦の民俗」『富士吉田市史研究』2
- 丸島和洋 2013『中世武士選書 19 郡内小山田氏 武田二十四将の系譜』戎光堂出版
- 山梨県 2000『山梨県史 資料編』17 近現代 4
- 山梨県 2003『山梨県史 資料編』18 近現代 5
- 山梨県 2006『山梨県史 通史編』3 近世 1
- 山梨県 2005『山梨県史 通史編』5 近現代 1
- 山梨県 2006『山梨県史 通史編』6 近現代 2
- 山梨県南都留郡連合教育会 1938『南都留郷土誌』
- 山梨県立富士山世界遺産センター 2019『吉田口登山道の騷ヶ馬場と流鏑馬』
- 山梨県立博物館 2013『企画展 山梨の近代人物と鉄道展』
- 山梨県立博物館 2019『企画展 法然上人絵伝～親鸞が追い求めた師の姿～』
- 山本寿々雄 1968『郷土考古学叢書 5 山梨県の考古学』吉川弘文館
- 渡辺保 1987『郡内電力史』